



門牌 3909  
號卷

序

るよとせの中にありとありゆふとく乃  
物なり。どぐくかごくへ。近いの海れり。ぐもを  
ほんね。ごまわつせん。は陸奥の。すの紙  
も深あふまじ。はじめこそうちの物。こりうふす  
とつぐども。其ぬうだりゆひあ  
わまとども。夏うの。えり。ひととト  
孔れをとて。き絵の。りねで  
かくれて。きぬのた。一

雅を帝



いふあらん。ともか中ひ女すうりて。あらぶ。  
圓倉。故がく。難於じ。七夕まやうのわへ古へ  
今に至つて。かくそんもはを。時よ候もわね  
すき。まく。あ。明るきのふを。やふ中。ども  
と。本あ。ほえに女すうり。やびに。せう物。ま  
を。物を。ちくまわ。く。ば年はむく。見る  
称。固く。じし。しゆれ。ども。續。いわ。友と。と  
人。とく。く。ほく。うれい。うへす。あも。本る  
の麻衣。独。つて。く。うう。ふ後。と。ひざれ

べ。往に。あ。已。作りぬ。更に。渡。去。東方の。も。遠さ  
れ。一。書。と。そ。未。干。卷。已。と。と。作り。中。に。已  
く。も。始。み。女。女。の。教。ま。と。せ。れ。ぬ。  
僕。け。事。不得。に。よう。よ。ろ。き。じ。に。憲。に。海。人。  
すく。纏。く。う。じ。か。く。じ。や。ア。レ。と。つ。こ。  
乃。書。に。か。う。ぐ。人。干。千。も。跡。ある。も  
き。と。私。医。病。ま。と。捨。い。も  
耳。に。あ。す。キ。あ。れ。が。海。す。林。

そり。行の塵もどせん集先々くらふ浦じて。  
あきづ紀を作つとつたまよう窓アキテ  
あくを君の枝をさとすとおめめ御清ひれん人  
のあごくろと私とつとも。放て得るん人の  
あいわば。唯いとあくね女より。故とくび称。  
新しよくあくべほとうれじとぞよの

寛延二年己酉初夏

攝江 四中友翁予書

度會直方著

雑あそびノ紀  
あそびノ神松ぬる年のむ／＼よう今にいそうそ  
二月の言ふよいとすみやまもろ萬松じつ  
源をくぐる竹にふ早ふる神代の者もくは  
きぬ神半すくはせくら人のひれいのまち  
りてゆき神路とのうちは林乃道あてもほ  
きくゑふにあそびしてくらのアラノト  
ば其のあひ根と人枯野りもあかわらひも  
ト木の名海をくぐる求ひとくよせて、

は政<sup>ヨシ</sup>ヤと同<sup>ツミ</sup>と本<sup>ハシ</sup>まひ天寶<sup>タヘイ</sup>十一<sup>イレ</sup>年<sup>ニ</sup>い始<sup>ヒテ</sup>  
冠<sup>カウ</sup>位<sup>イ</sup>十二<sup>トシ</sup>階<sup>ケイ</sup>を宣<sup>ミ</sup>せんは十九<sup>トシ</sup>年に百<sup>ハシ</sup>左<sup>シ</sup>の御<sup>ミサ</sup>朱<sup>ス</sup>  
の邊<sup>マツリ</sup>冠<sup>カウ</sup>乃<sup>ハ</sup>アハ室<sup>ムロ</sup>めきよ<sup>ミ</sup>ればち<sup>ミ</sup>子<sup>メ</sup>の幼<sup>ミ</sup>  
はれ半<sup>ハーフ</sup>ととくらへ京<sup>キョウ</sup>えまほ<sup>ミ</sup>すみ人の後<sup>アフタ</sup>に  
そ今<sup>ハナ</sup>の郊<sup>ヘイ</sup>へ天<sup>テン</sup>里<sup>リ</sup>と名<sup>メイ</sup>付<sup>ヘ</sup>て唐<sup>カウ</sup>士<sup>ジ</sup>東<sup>ドウ</sup>王<sup>ウ</sup>と  
此<sup>セ</sup>仙<sup>セン</sup>人<sup>ノ</sup>乃<sup>ハ</sup>像<sup>カモ</sup>とし<sup>カモ</sup>り<sup>カモ</sup>の<sup>カモ</sup>の<sup>カモ</sup>にて仙<sup>セン</sup>  
まよあく<sup>カク</sup>ヤ<sup>カク</sup>れ<sup>カク</sup>候<sup>カク</sup>も<sup>カク</sup>是<sup>カク</sup>  
や<sup>カク</sup>一<sup>カク</sup>身<sup>カク</sup>日<sup>カク</sup>本<sup>カク</sup>紀<sup>カク</sup>と<sup>カク</sup>う<sup>カク</sup>  
七年<sup>カク</sup>の正月<sup>カク</sup>二月<sup>カク</sup>大<sup>カク</sup>物<sup>カク</sup>事<sup>カク</sup>外<sup>カク</sup>り<sup>カク</sup>を<sup>カク</sup>

居下と四方にきまつた者命もあらそしりありう  
和身坂とよふにありまづぐともう一人  
アリ小女ありをみまき地安彦が妻の吉田媛  
と後つて孫反を企むよーを告めと被  
には妻那志ふ殊殊多とよまアソクトハ妻  
那志ふ殊々むかわきじのキアラと新日午紀  
にあらざれとさばげは既よどひとよすの  
あつて尼徳をす乃はようへんそこ百年以あ  
まさればたすよりちつともれび又是國ア

秋圓(あきだい)ノ木朝(あさ)セ一踏(ふみ)ひ是(ま)シモヌ神(じん)天(てん)室(しつ)六(ろく)十(じゆ)八(はつ)  
年(ねん)の秋(あき)七(しち)月(つき)任(おき)那(な)圓(えん)ノ住(す)ゆあ(あ)く(く)一(い)うれべ  
院(いん)にと(と)みあ(み)じと(と)み(み)の(の)ゆ(ゆ)じ(じ)う(う)え(え)年(ねん)  
後(のち)乃(の)り(り)て唐(とう)土(ど)東(とう)王(おう)の(の)像(ぞう)じ(じ)り(り)て(て)  
よ(よ)び(び)に(に)ね(ね)ざ(ざ)ま(ま)御(ご)う(う)にて金(きん)く(く)鹿(か)土(ど)り(り)誓(ちか)い(い)傳(つ)

今(いま)るに(に)あ(あ)く(く)に(に)神(じん)代(だい)の(の)時(とき)う(う)ち(ち)り(り)の(の)せ(せ)、  
乃(の)致(いた)し(し)と(と)よ(よ)く(く)今(いま)の(の)せ(せ)、  
主(お)いて(いて)あ(あ)拂(ほ)く(く)も(も)つ(つ)也(や)源(げん)氏(じ)河(か)海(かい)舟(ふね)い(い)ス

ハニ業(わざ)と(と)こ(こ)に(に)外(ほか)用(う)も(も)あ(あ)り(り)ま(ま)り(り)と(と)あ(あ)る(る)小

雅之上



負ふるなり這子のやうに作まつものと爲ら成る  
紀一多く又先源氏は乃國須磨ノ浦にて船  
経よ附人船を作り舟に坐み流一多く又須磨  
乃卷よりくらうけの人の船も這子の數すべ  
あも一客魚鷹をくわい魚車をもうくら候ぐ  
さて極物とよづ也あち雅仁天皇の二十六年  
天照大御神御努力百般度舍乃よ十日川の上に  
立候店乃は乙未の命菟とて備靈を作りく  
倭北命には抜解をあそび是後魚車作れ

モ芳靈からへる人船をうんと抜アとのは  
主身にあらまりねせぬ羅船たりうすあら  
神ア不あそば芳備へ抜解負て海東へ歸  
捨あらかのほく身もどめあらも淺く平が  
早アとみ乃は模様たりもにようあいあ  
よりけえ四そ極物と名付て事レ小四  
船と模様レしむれ神早アとめに相手小  
芳奈とく幸モとて唐王にて

消とよ川乃上にてまゆ山男女あつまつり斎と  
よ草をみてゑび尼羅を祓除する儀式を  
て女人の糸を流して詩を作り酒宴にて飲ふ  
よき曲も宴とよし羽根と二十四代の宗  
天皇のえ年二月己酉日移それ宮へ御  
幸浦より始て曲も宴をちりきよ  
日辛紀によくあり我朝にても唐土ふてこそ  
ひりへ之月上乃巳の日には辛酉也しが唐土  
ふてハ麿の代り月上の己酉日を止く二月二

日に定めと宋書とよ書に紀伊の秋國とても  
上己酉日とへづれども今や三月二日小いとくじ  
まととへちうけうちわられば日女子の菟原  
ておぞまとも被毛引合とればあらすゑと族  
隣くゑみちう事経ひみし伊勢乃神よりへ  
ちよう女子のりておじ事に小余むいひとと  
ちうれ異なり人ねを作り豆豉とて食膳と  
ゑせ家臺乃上に高臺あり其拂ひはつき  
庭しきもあてねておぞとす竹子のしらをあて

源氏物語 美作妻には上やさうたゆけり  
源氏のゑひは姿をひとみに作りまし  
るあ男房を源氏ゑと名付女郷とまう  
と名づけ又婦はめ屋うふむつましと併とす  
いに源氏ゑには久まらず病ひとすて  
おじ経つて大義が屋臺とうづーくには往  
候立あつよ。是式ががちよ。竹も女へもむれ  
も絆ともてとい嫁つてへまにとくじ生歸  
乃中じうまく肉を活殺を女の鐵ふと

さうなればやまとに由ようまをぬそひゆく  
せうまにきんわくきるえをひみとくふへあれ。小き  
えねままきりくちひる子を難といひ難病  
難れすんどううおろひくりせのんふねり  
ううまく藤を好み新くくき新をもす  
あうびりきのとみれ細汗をる物をゆ  
い難をえきに作りましてあへをあへとま  
くよやうりくぶく御くらとゆくいと  
今世にひとれよ難のとみれ柄りねり

名のとよてむいまとくわ名に叶ひどく  
小傀儡作のりそあつよ歎托人形うごく  
行ふそやをみづれ顛きらへとく修る多うの  
ふへサミシテ名命の内体をかくどくふ縁もす  
ある也は朴そえ已ま命そぐトを圓形く四  
出盡ツブふみ十枝ヒトキ乃小汀ヒタチへありまよ附海ツブる  
浪ハタカノ上よりらわざん男白歎ヒタチ乃はそゑ  
鷦鷯スズメ羽ヒタチをえきて野ヒタチとあらわ朴ヒタチわうす  
已ま命ヒタチ太にあやくよヒタチさくまゆにのせてす

於じうへば眺ヒドるい頬ヒラと雲クモ絹シルク大已ま  
命ヒタチえよあすま天ヒタチにのがりまヒタチてひ生ヒタチ  
を奉アキて高タカミ宝ヒタチ産ヒタチ靈命ヒタチに向ヒタチ給ヒタチハ吉ヒタチ祚ヒタチ恩ヒタチ  
み百ヒタチ乃ヒタチ林ヒタチめり其中ヒタチに吾ヒタチ捨ヒタチ乃ヒタチるより海ヒタチ陸ヒタチタ  
絆ヒタチりぬきれ朴ヒタチわうそよにけ思ヒタチほじよく  
育ヒタチミヤうしもとと妙ヒタチ命ヒタチわういすたヒタチ名命ヒタチ  
ひ丈ヒタチ已ま命ヒタチとひふを合ヒタチせ醫ヒタチ術ヒタチを初ヒタチ  
いとくヒタチくヒタチく乃ヒタチ爲ヒタチ難ヒタチをほくよふ事ヒタチ乃ヒタチ  
法ヒタチを定ヒタチめて方ヒタチの仄ヒタチ歌ヒタチ不鮮ヒタチを接ヒタチい迄ヒタチ後ヒタチ



人を仁徳より清むるをひかる書より  
もとまもろ測よりもぬく今世よりも彼  
二朴のよしと雖あらしか方御ゆりて御ゆきす  
そのみゆけりとやま後後明天空の山は  
百済より醫乃博士海より二朴のさざれ  
玉あし一 方御こりりかきてせにまくへ  
みじまと中もたても和氣丹波乃友家  
いわくも御と傳へまくよ良  
乃は此に御きうされは敵をちくく作

る年を以義とよひ小年齋乃遠風に  
て才志名の朴りえらかくはせぬ  
内縁をひきすり雅子ア弟にうけておひ  
りくの灾厄を拂ひ深くお役とうする朴  
生ア也アしがちうね思ふべくすふあに被  
又贋乳ノ時圓倉とソドくとめぬをも  
被るすれ朴代の時圓雲非蛤圓塔乃二朴と  
えくあを神の抜らもぐれを本とす  
時圓雲外故佐宣とくのを作りて

はは佐宣とよあにゆ神大主とて、  
ゑせら衣肢いそをは宣と名付こなづけ。是れ宣  
の中うちに佐を置おき。あらゆれ  
賛さんれの時圓桶えんぱうと云いふ。遠とおの先まへから  
此車こぐるもは圓眼えんがんと詮圓眼えんがんと云いふ。故ゆゑに物  
あり人ひとりせとみて天あめ觀くわんひみみをりておはす。  
始はじより仁德じんとく天あめ室むろア津つ時とききりをはあまあま仁じん  
室むろア日ひ時とき天あめ日ひ檢けん新しん社しゃより七しち種たねの賓ひん物ものを持もりて  
あり。是車こぐる豆志とうし八やあち神かみ豆志とうしを踏ふめ也馬ま

圓出だいあに往くわてを再あ乃女麻ひま多鳥たう岐ひを委まて伴ば  
豆志とうし之の所ところを產うめ。仁德じんとく天あめ室むろの内うちを將ま作つく  
を善よく事こと成なる。社しゃア神かみ豆志とうしをも承うけうけ  
に其その時ときに見みれ秋あきふト冰ひき社しゃア神かみ豆志とうしをも承うけうけ  
彼かれ岐ひと妻めにせんと思おもひ。衣い禪ぢ豆志とうし作つく湯ゆと同とも  
て字字乳ちち豆志とうしをも承うけうけ。との経はは承うけうけ  
相あわせてもうえとが家いえア株ね小こア。毛けももうえ  
古いア紀きと化か。これば始はじもとと  
ごもと和わふと今いまて其家いえに之へまきと

皆謂て支拂とよりあつて後波足の朴生  
乃贈禮に取いもし宇れ立改め紙後りど  
てぬり版立て以咀くば姜毛を活てあゆ  
若木を候许男朴板ゆ字敷志は敵  
をねじりて侯いもへとありたしばもは敵  
乃がくちき小姜病愈く幸のごとく  
收氣一すとせひるよりに徳えき乃済は  
字被至改ものとて敵を作り女ふりりてお  
じよとあくとある書にあらざれ行之

却く通々てあく乃御度をかうり竹  
にて付て清少納言がむま紙にとふ  
そわへ抜くる姿をあわそじの御度と  
も二月三日とづれば乃中のみ鄙の見  
きれをうむ乃木までを難ねどいとち  
僻ふだり人日も往れく事ゆくまの  
へくともまくじと御度もりがおう  
氣ごとくかんまを立きよめていひ  
一ひま帰じても害伴を候ひじりと



あそぶ女の教主たれは夫とも妹とも人  
乃許へ嫁してひま乃歸ひそひと族に人嫁  
へまを生むぬすに引れ我心乃まに嫁まし  
女乃猶もをきられりばよにひまふとさめ  
捨ておれを悔きどまのひきよは方  
志へく思ひもゆきのからふなりる難の調  
度をり思ひもゆきがくた余情をくみて又  
おもへねくへ難の調度のねくちるモ中  
に太強ふとく物ありきも神代よりゆきゆうて

鬼魔を退あ災厄を祓ふ誓ひ考わせまぬら  
やのとくのみことくひこりでまみと  
れ少殊命ぬま未だ人出ふる刀清徳ア  
及ふる幸いもあつて秋子孫のまの隼人とみて  
はくやさんとおきひよじ隼人をねん人ともゆふあ  
るに天宝の天宝の天宝の天宝の天宝の天宝の天  
に人嘗みの日あゆて乃下禁裏に入はせ隼人  
をぬ狗を放ひ床ゆりありられを狗吠とく神  
代乃き國也とくうひ狗吠もくわゑ神を吹

言返近くたまびうちゆへ今も神の社やアリ  
に拒魔太カミイハを多生タマシもかれより起れ也今乃  
大張カツハシ子コノも物人ヒトモノとて御ミテにうち拒魔太カミイハトシ於密  
そじしシあ難相度ハラシマドの中小てもオ一ハナわとす  
ひゑ魔エモを拂ハラフシテ害ハラスムアリズハラスル神代の  
世人ヒトノのさればハシメス今世カミイハでも小四シヨウハガジ  
ムヨリハラスリあらけ物モノのよハラスと唱ハラフシモゑ魔エモ  
を拂ハラフシハラスル獻勝サムライ乃ハシメにて爲ハラス事ハラスチハラスム  
神カミ御ハラスチハラス又ハラス祖室牛カミイハ天王カミイハトシ人ヒト太ハラス神人ヒト

とハすハあハいハ草ハ人ハの後ハ高ハきハしハアハレハ難ハ  
拂ハラフシハラス神代カミイハトハラスけハラスモハラス神奉カミハラスアハラスハハラスからハラスそハラスうハラスい  
そハラスべハラスきハラスりハラスにハラスあハラスハハラス御ハラスるハラスをハラスそハラスモハラス女ハラスのハラスたりハラスも  
キハラスとハラス思ハラスうハラス神明カミイハ乃ハラス宮ハラスもハラスいハラス御ハラスんハラス一ハラス  
ミハラス作ハラスてハラスまハラスまハラスまハラスくハラス人ハラス

附 七夕セキシあハラス乃ハラス記カニ

セクハラスのハラス魚ハラスのハラス竹ハラスにハラス綾ハラスあハラス縫ハラス紙ハラスとハラス書ハラスいハラス模ハラス  
様ハラスは武丁カミイハとハラスりハラスのハラス仙ハラス術ハラスとハラスくハラスうハラス財ハラスをハラス費ハラスひハラスりハラスよ  
やハラス七月ハラス七ハラス日ハラスいハラス織ハラス女ハラスまハラスこハラスいハラス行ハラスをハラス渡ハラス今ハラス身ハラス内ハラス

てつ織女ねむ乃わうてじき後れ武丁と人  
あ織女もぐくま年いもるとせアノ人今小  
つるまで織女春牛じ勝どもとよみまき  
じ半身で作園志じ勝にとみをたどり風と  
徳ひうぶんぬにをん竹いじも見ぬりほ  
のもう秋圓よまとほうり毛巧美と名付て大  
内乃山行幸とは本多唐土にて毛巧樓  
とてみ毛の糸をりて毛と絹び作り毛とそえ  
葉をまう文人の詩作りて二毛にむひる女

どらハ紡綫乃もひどと引竹とぞ日のひみて  
ひな後天會れ天平勝宝七年より始る  
御園の二半柱えとつまひもくちく七夕み乃  
儀式ハに次第とつすものに紀されく夜夏いが  
ける七月七日されば夢人詩個度を拂し拭ふ毛  
ハ唐土にて日ハ衣肢を拂し事は肠にまの竹  
毛竹用うべ一板清涼扇の底に木ほり毛と  
机と四脚立てあほり拂春ぬに打太と  
れの上に毛くれ物ふとく(津所より等一張)

雅と上



一  
七  
強  
アト一束かあふアれの上  
かれ妻に奉仕と  
立てあまびへ至延暦十五年ノ例と用ひとすアレ  
乃上大極ね也もすゞ、湿季をくゆせ盤にも  
をへぬ大をり墨にうに今松木う乃指わう  
常に半日はま秋の酒にじうとちり鹿土にても  
け日よさればま徳男女湯宴（シテ）とお今を奏でたる  
ぶりアタマ人ほりけんが旅よ見る

さざえと星合の音アモトとそ  
秋のあくべに琴ナホシウチ

アアアの山とアヘ鹿土にてアテ山根山人漫  
きんじつう秋國まであまア山ともアハ十山と  
も天安山ともアハ朴代の時八百萬朴天安  
山の山ふき合すとアテ山根山人安山ハ天安  
乃名也と天良へひまうされば天山と安山と  
家清ハトミクル

今宵ぞと星の音セの安山や  
月のみももま

鳥鶴アリ橋といふを發舟とアサムシ野鶴のみ

まち  
城く 持そりて 織女と ほにとる。又 六日社  
主  
を 天のそよ拂と う事 風柔めひよ人竹  
主  
いわ引恒家集アリ。

うきよわきよよ爲経まく

七夕とよへまま牛 織女うのめの二星にぎやきとよへてゆるすにて  
男ひこと女めの七夕しちやくををめん写うつとい女めの七夕しちやくをを織おり非ひとよへて  
世よに是ことととあらあらふい年としととよくよくしに因いんて牛うしを  
素すくく風ふ情じやうを絵えがたせしせしども体からへゆ致むかせせとと

歌四首みて手を牛いとせばざるたまうれ風くめほ  
魚土のゆりと糸圓ふ侍てうる由され丸たまもと  
久名はねに年々一ときみえ其の故に糸代奉に  
味耜もんあら松糸の味下照火の歎にあもうや  
ととたかごとのうきをねどとす年アシヘリモハ  
まももとての名へ改に糸代より有ク

圓倉乃記

かあまくもひそむ者人未りよりめにま  
わきよ秋れ陽徳の國へ百千乃化國  
とくられ作げばいよくもく彌はいよくもく  
わくの國土藝しうぢうかどうちうゆ業ま  
でも神のまち乃御教を種とて万ノリゆ業  
きいでそにかうまえわれどもふれ上幸あり世  
の星あくやまの神と人の中絶くはみされ  
とも今將とくアセにひとりて人乃心なり

うり起して千軍據  
神主ひたりに乃日本  
と本一物主まちの四  
女より考くりてあよぶ  
も主承給へ神代よりは  
うり起し言の出でば  
そいもありてみゆきと  
圓合の路を考へば古  
見合下

主事鳥尊乃御子大己  
八上は主久々子あり妻  
ひ拂り乃主八十神御と  
ふ幸にてねせんとつら  
タヒ太己主命とにして  
のがり神主産主もに主  
御圓非蛤圓非とつが二人  
をれてぬ乳にぬじばうく  
見合下

生キテ一ぬきの神素事馬をアリナリ  
てれひとかに努那とタマ跡に本キムモトセニ  
ひもよの神と海モ殊モリホミトシフマアリ  
ルモ拾圓那の名ヒテモニハの圓と拾  
い圓合ヒテハヌ帰和合乃御教ヒヨリより  
起モカキホモシトヤヌキ行天宝ニ三十キ  
のキ十日ヒカグマヘ行幸キマハレ一上総國  
より安房の水門ヘ海ツモアサヒタマリ之がモ  
のハシラモアサヒシモア船モアシモ

海キニ出テ白蛤を拾ヒテハ蟹壳ニル  
とテ人至浦の蒲モれてモ絶ヒテ彼白蛤  
モ難カヒテ追先シモロ白蛤ヒテハナヒの  
半ナリアモトテ日ノ午にて拾圓ヒテ同生ヒテ  
絶縁の物トテ残れアリヤヒ蛤の茎と肉の  
持半ナリ木竹の系括歛ナリハキト  
未だあくまぐりふう白蛤といシム  
されば京行天宝のえ蟹モモツ拾ハ拾ム

すへり。我と清后の縞目大郎は坂入殿  
のん様ふへくや和にゆきとと清徳小笠  
つるひにてえまもか唐太小てへ駿馬ことね  
國文王とア屋人の清后大娘とよひすじうた  
賢女にて後せりへはま帰徳を待に作つて  
寄くくる駿馬へらの湖よりと復アタラニ  
を國駿篇とて待經とよ書に記すへば  
さくせきうけちもへ駿馬へらの湖に在れども活  
して候くらまをせず而紙をとて於よ半天

珍とま歸別わりとつれ故にかうひへ育み  
一度げきでひをさるとせなすり

みとごわく湖にさゑのえり日経

と欲にもよせり又蛤へ中に多際をいざと  
珍にも作りまよぬ照屋珠とついて女を口を  
詰め帰徳家を熙せん小みぞへて復りの  
おり極又國公のせにそん小ちじまへあれ  
官おのましいあらむる小村上天皇ア汗



源乃ち明とや人かくはに醜碑帝の御る  
にあ才字もいえどうとぞれりば原保之年  
乃正月に左大臣小野トは四年の十月アシテた太  
臣に將ドあひ西アシテ大臣とよりてづなせのれ  
ありとゆーく時うなあひーゲ冷泉院の清  
代志らしめと安和二年の二月ある人の後云  
に尼せられ大臣権仲とみてれ室に流され  
き時越あ守み時がじとめ紫式部又往  
して右式部といふがむとあたう大臣

おもてまきりんが人方うに物を欲しみ  
大臣不ほの事にいわしれし我尼よりて配不  
久月をうんまつりそひとあみすされ  
とも今えせんとくもくにありもねに思ひ  
をかし給ふもふされば秋心の苦惱を人道  
のまゝを解明とて明んとそあり終へ  
くれとくもぐれな世のは雲にそつれ時の  
さくらにまことひつた日あじてる波くまん  
ゆうじゆうあそりとまくかねあて就海

乃付をゆべ  
事じゆきとて  
常し松並あら  
伊勢國二見浦よりほ  
蛤耳向とよ大蛤一タモれ出  
秋方小豆、先陽圓の片と式アにまつりり其  
ヒトも大内院送る内院主より上東門院へ  
ひきとてまた日のほれくさくまなづきめ  
すらま紙やけひとやそを絹ひりに女院式  
絹紙石あらのとうまうとくとくわせ  
れば式紙がアラハナリ  
きわめんのうり竹

ごとく行かむらが黒豆作をもん國別  
きめばめほしとまへわにじく作り出  
まゆせりく  
くわれば思ひすらしく  
も化れと仰きくは源氏物語六十回  
作りてもうたすの巻は巻をほじとく  
ておきをくゆる式部の名をわたりて  
はふ式部とか。いやうきりしてもあ小前小  
西え丈臣乃ひまをとくとくに被ふる源氏に  
ておはせがえ源氏と假名ともわゆる



うれ世の小ゑをひに來もるまに作りめりと西  
ものとく一そ一そ一そ一そ  
え人月へに年紀本にありて後日融院乃多福三  
年四月にゆらされて都にゆりのびり式給にあく人  
玉もい一月乃り牡貝を秋方小ゑを融し行の  
北國にあやしい念せてあがいて玉一内り末の  
邊りぞりゆと傍りあくまろじきよとまはま  
ゑの女房をすむかくお典あるゆにありし源氏  
物語またこり姿を蛤の中に絞つた貝合ひた  
わじれをよせより始て竹とやひにこれせ

小ゑに本よ付て三十へ種の欽仙貝小食ふ云  
乃色紙貝など友家より送出されけりと貝の  
数は百六十種もそそ中欽いよまくより二百種  
種に及ぶたり但一そしれをきの貝とあくめ  
そそくの名と付くるりのくれば蛤貝一種にて  
陰陽和合の貝合とぞとほえいえすりてお  
じうれども貝合乃名へ口トと放多別をあ  
りうんとそしれ乃はよりう貝合とすが波先  
ゆりて貝合とこくへゆるたり主徳欽いよ木本

集ありありよも

今ぞ二元の浦りをぬづうと

貝合としてやへたりり

万葉集に筑波乃島のいりせれ貝いらすとも  
も貝蓋のゆとくわくのゆのゆとくの林とも  
麻浦うねりに麻浦明神はくの林とも  
アキラ又佐吉の浦り貝いらすとも貝合の  
ゆにて貝蓋のまにあくばじめりよもる  
ニ元乃浦の伊勢國度去都してめればしづく

あいとけ浦の蛤貝を貝蓋のゆに用ひうりへ  
ふうと由縁も作り伊勢とくわいとせとく中界  
て内えハ陰秋にてキリキリ和えハ陽秋小あ  
はくとせばのほく圓の石もあえりくどきひ  
も男女いとせり表儀いやすい竹くらゆくじく  
け圓の二元浦の蛤と貝蓋のゆにせし物す  
へくづく蛤の取をアシケレハ陽圓け川小を  
一ツアキヨニツの巣あり陰圓ア川に一ツセ殿  
にニツアキヨニツの巣あり陰圓ア川に一ツセ殿

まゆ和合乃道をかりて物ゆべ物語り聞け  
桶を身の間度とする也されば屋人道を  
待ちをまゆにすとみづれが男女をせしむ  
いやじせに大切よりのかへるゝたりと  
きりえとぞりよとぞりえおとちう明友とす  
足の傷もまゆの中より上あつたさればゆ  
うせにとくべに小れにあらど男女いひせりう  
きた中にとくべにかくへ和くら本方に活れやまとく  
くろ方小引とやどくはよひのとくはどくさも

げ道をりてまゆじるまとさろひと人別  
わひと前をあらうととあるへ難波乃はあひ付  
てやくはの貝ねくく まくはと用てえ葉とと  
くまよとく まくまとへふとくはとやくはと  
けくとやえりん乃浦へ嫁へてひまの心にあと  
うい男ぬに者かトはくままゆくはと人  
をが一世のらかの男にまよくまゆくはと人  
は行の男國をこむか一 けり女國らひか乃  
と男貝千石をあらそと金をとすと  
遠遊も



合ふらばとく直婦へあまにまよへどもよ移小  
肠合はゆる物をあに一叶のりてあまびあもとあ人  
とも秋杜圓よれぞしに北圓へまつしざる造化  
のうづのうきが孤兎も神乃訓門の教に  
せきし故ゆゑを身はじてぐい通なれりと  
あそじまふ小祀ざりを徑にあらびげしく  
斗西き通の教をあうりしは小祀院無永年  
中康院義滿云伊勢今川小笠原乃三家  
に於せてよりく乃礼式を定めさせあす中少

圓蓋のりてあまじん陰陽主奉乃表半身婦  
和合乃放さレハとくもくら祝云の火事也と  
まほよとまよよりトナリ也せまとも新婦の  
まくら寒乃布後にハカマに圓桶を傍ス人く  
行ひとへたりけり玉圓へ陽すて男なり出圓  
八扇に象嵌肉の度ヒテニ十二月に表かま  
上とれりて家の定役を経てたるひかせ  
足四半へま反秋冬の四季に表を玉圓桶結

よに惣の方を上へたすを陽の義也。上圓桶惣  
の方をトヘたま法乃家をうそとこもてれ故  
寔ひをえれともばどくとぞれ家の後をま  
傳へてまく圓にもよして寔小まくばどせせり

欽かきと乃祀

今世に安守りりておゆす御ゆきの御外房  
御竹林に清和天皇大和のはた中將主原業平  
侍従とて伊勢國へト向の附帖子内親王海

えにゆうるくはとく人をねどれらうてお  
のゆをともゆくべくやせどもやてもくび  
にあら翁が明日ハ尾張國へ旅をなされ候  
小はるしあまひゆり人をじりてあらく乃  
中とゆりいぬきひきられがおえもあみ前  
をあらまにかげて今別ゆくべりの、  
時をうん年もいりましれどせりてはあり  
るやどりゆくとくひじしてゆくみ  
やうかしめがええもとす名あてねは

せ経しむすりとのをと益にきて出  
せら人のてれどぬとぬるふ われ  
とありれば業平れめへど後ねり故もて  
くろ隣の巣にてトのをとせ続まつり

又ア坂アせんへ紙をん

けりの伊努物役にえびるをとりをすり  
上トのるをとくじうわー別れまそりて  
あそぶゆいきりぬ候ねり巣みてトのをと  
おつだき縁にようすがくわゆを續ね紙

れとひきうちえをいはりるまの竹ハ拾達  
集に内よしとくと人をちりてゆくを承ふそ  
くまよできるやどにじさんとすうてくわす  
て女のいにしきうづき

人むじしも今れたのキーヨ

よもよ家々ノ

爰ふるるとやねをとにく

よきもや業平のまぐるはりのゆく  
因にちかくゆくのゆ小年ばん太郎



いて友女のりてあまじふやとせふに  
つすりのけらもとす物をすみを斗ひて名本  
を経ぐれテアヅカアラドアリヘモ其教訓  
に名合せて名と名不似多々人をすむ合せ  
をあくべとみにいへるのちり見へ天慶帝  
乃女帝立權殿の考るとアハ小糸た太官帝尹  
の御女にて海セキアミド内へまつまつ非  
悉ふてかく一はと時は又師尹ムアトヘア  
きをあくべ行に一ふるむが若ひき次にさん

おほ今を年人に深まさんとおがせね古今の  
歴世をもと見るうべをまりんとれすえひへせと  
せあくとうん教あくして小それいお今集のす  
乃名石と経ぐれ別のれに名石のすと  
引合せて経圓を引ゆにあらぐお今書古  
乃伎と一あくとわる友家の書ふあくと  
うれ経圓のぬきとぞうえうづくれ年石とす  
圓とあくと名付一牛へ百羊ふのと  
アキタリ其ゆへ今乃かくとらの

ひ絶てからひ後陽成院をまも二年八月に紅毛  
人始はじあみぬるふある被紅毛人今のゆきとお  
あり日本へ行ゆくとすをいぢじ委の貿とふる  
そくにしてしりけ物ものひりゆくとすをいぢじ委  
とすをいぢじ委をどくとすをいぢじ委にたりりん  
のほりうすをいぢじ委もすれむとぞゑづく  
れ物と泥ねどくらせばまもすれむとぞゑづく  
と清きよか納なえがくいとままくわゆざうむあん  
女めるへう圓まんとも緩ゆねとそよじ汲くえまこと

族ぞくとあら乃名なのとひいとりれすとよじ  
天照大神あめのそらおおかみの御託ごとく立たにも其物そのもの乃指ゆびをとど  
立たととてはれ今いまのはじくとすへれまに  
ツつとては人の教おとしめふらしげとうれれ女める  
まうともあらざるやう物ものあらざるふ  
ゑゑひとしして物事ものごとアキラ原はらをふさん  
半はんちも要いのたまげー

寛延二年己二月吉日

江戸通本町三丁目

書林 西村 源六

京都寺町五条橋詰

書林 額田正三郎

大坂心齋橋南詰

書林 松村九兵衛梓

